現代俳句 いわて

発行　令和五年十二月十五日

岩手県現代俳句協会　No.81

岩手県現代俳句協会
年会費ご納入のお願いについて

当会の年会費は、例年総会の当日ご納入をお願いしているところですが、予め左記をご参考に、令和六年四月末頃をめどにご協力くださいますようお願い致します。

一、令和六年度年会費
　二、〇〇〇円

二、◎振込の場合
　岩手銀行本店・普通預金
　№一一五五四七六
　口座名：岩手県現代俳句協会
　　会長　名久井清流

◎現金書留又は
　定額小為替送付の場合
〒〇二〇－〇〇六三
盛岡市材木町
六－十四－一〇〇三
田代　節子　方
岩手県現代俳句協会会計担当　宛
（会計担当が変わりました
　おまちがいないように）

○参加してみませんか！

現俳の本部協会員の方は、会員の交流欄「風を詠む」に参加しませんか。作品募集中です。

詳細と専用ハガキは『現代俳句』十二月号の巻末を参照ください。

○現代俳句協会の会員を募集しています。

お知り合いに興味のある方がいらしたら、お誘いください。

問い合わせは、事務局の五日市明子まで。

〒〇二〇-〇一三五
岩手県盛岡市大新町七の二〇
五日市　明子方
電話〇一九（六四五）七四三六

表紙絵について

今号の表紙絵は、盛岡に住む平舘公二さんの絵です。

来号の表紙絵を募集します。ご本人に限らず、お子さん、お孫さんの絵を夏谷まで推薦してください。

カット：胡桃

令和五年十二月十五日発行　第八十一号
発行人　名久井　清　流
編集人　夏　谷　胡　桃
発行所　岩手県現代俳句協会
〒〇二〇－〇八二二
岩手県盛岡市茶畑
一－一－六－四〇四
夏谷　胡桃　方
電話〇九〇（七三二九）四六六一
印刷所　小松総合印刷株式会社
岩手県盛岡市鉈屋町一五－四
電話〇一九（六二四）一三七四

一年を振りかえって

岩手県現代俳句協会副会長　さいとう　白沙

卯年は飛躍の年といわれ、本協会も期待の内に令和五年のスタートを切りました。

二月二十四日、総会にて事業計画案・予算案など一連の議案が討議を経て可決。その他の項目では、事務局より提案のあった会計及び会報誌作成に担当者を配置することを承認。会計・田代節子さん、会報誌・夏谷胡桃さんにお願いし、補助者の協力を得ながら、事務局の負担の軽減を図る方針のもと活動を開始しています。

また、句会については三年ぶりに対面方式で二月、六月、十一月に開催され、会員方々の研鑽と交流の場が持てたことを幸いに思います。

九月には第三十七回現代俳句東北大会が福島市で開催され、会員関係では、秋田県現代俳句協会長賞・五日市明子さん、秀逸賞・小野寺東子さんが受賞されました。

来年は山形県の予定ですが、大会についての意見が様々あるかに聞いています。高齢化や若年層の減少など諸般の事由が大きく関わっていると予測されます。ともあれ、東北大会は風土を異にする各県の俳人が競い交流する場であり、発展的な意見を期待するものです。

コロナ感染症五類移行から半年余、歳末を迎えました。会員の皆様、今年一年ご協力頂き有難うございました。また会長始め事務局の方々、お役目お疲れさまでした。

来る年のご多幸とご健吟をお祈り申し上げます。

令和五年度総会記

五日市　明子

岩手県現代俳句協会令和五年度総会が二月二十四日(金)盛岡市勤労福祉会館に於て開催された。出席者十五名。

(1)令和四年度事業報告

第五回通信句会　三月　参加者三十五名

第六回通信句会　六月　参加者三十一名

第七回通信句会　十一月　参加者三十四名

『現代俳句いわて』八十号発行　十二月二十日

(2)令和四年度一般会計及び特別会計決算報告

経費節減により特別会計に十万円繰入れ計上できた

(3)同、会計監査報告　適切な処理の報告

(4)令和五年度事業計画（案）

春期・夏期・秋期の各句会（または通信句会）吟行会（日程・場所未定）

『現代俳句いわて』八十一号発行

(5)令和五年度一般会計予算（案）及び特別会計予算（案）

(6)令和五年度の規約と役員体制（案）

(7)規約見直し（案）　規約の文言は変えないことで了承。

(8)新会員紹介

四日市　洋子（紫波町）

(9)その他

事務局の負担軽減のため業務の一部（会計、会報誌作成）を分担する。

※右記の各議案は審議の上、原案通り承認された。

令和五年度

総会・俳句会作品抄

令和五年二月二十四日(金)
於・盛岡市勤労福祉会館　参加者十五名

名久井清流　特選

冬空の鉄分不足のやうな色　五日市　明子

大澤　保子　特選

パン生地に聴かせるショパン魚は氷に　さいとう　白沙

さいとう白沙　特選

春遅々と一文字探す漢語林　大澤　保子

互選高得点句

パン生地に聴かせるショパン魚は氷に　さいとう　白沙
啓蟄やほら動かねば歩かねば　牧原　美喜子
冬空の鉄分不足のやうな色　五日市　明子
古里の違ふこけしやすみれ草　四日市　洋子
過去は過去炊き立て飯に寒卵　田代　節子

参加者一句抄

大きな鳥来て動かない雪の庭　新山　のぼる
冬空の鉄分不足のやうな色　五日市　明子
まだ醒めぬ山脈南部藩雑書　大澤　保子
やらはれし鬼は裏口より入る　太田　加留子
ぞくぞくと字余り俳句出る二月　小菅　白藤
パン生地に聴かせるショパン魚は氷に　さいとう　白沙
風光る伝染泣きして新生児　澤藤　はなの
ギスギスと音する気配受験の子　田代　節子
喜寿そろい笑つてつまむ雛あられ　中野　楓子
ゆまりたる尻美しや雪をんな　名久井　清流
猫の恋どうやら合意せずもどる　夏谷　胡桃
鳥曇愚痴こぼすよに鳴く鴉　牧原　美喜子
山笑ふカーテン奥に占ひ師　三浦　百合子
ようようと梅の一輪山の畑　三浦　寿子
春寒しこんなに人の死を報ず　四日市　洋子

令和五年度

夏季俳句会作品抄

令和五年六月十六日(金)
於・盛岡市勤労福祉会館　参加者十名

名久井清流　特選

夏草の薙ぎ倒されてより香る　四戸　美佐子

大澤　保子　特選

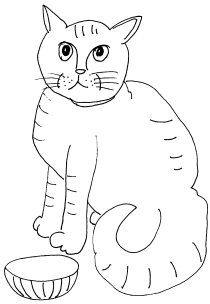
夕焼を使い果して野良着脱ぐ　澤藤　はなの

互選高点句

夏草の薙ぎ倒されてより香る　四戸　美佐子
この毛虫親は誰かと問ふ児かな　太田　加留子
幸の数ほど付いた山桜桃　澤藤　はなの

参加者一句抄

遠雷や猫の鼻づまりが治らぬ　五日市　明子
半分の夏大根を買ひ帰る　大澤　保子
諍ひの胸の疼きや薔薇の棘　太田　加留子
伊達と南部境やたらと落し文　澤藤　はなの
飄々と蚊に刺されたる男かな　四戸　美佐子
時の日や健康寿命とうに過ぐ　髙井　武子
初夏の風店それぞれのフランスパン　田代　節子
不揃いの籠の青梅みずみずし　中野　楓子
なめくぢり空を見上げしこと有りや　名久井　清流
青葉風くたびれた靴すてられず　夏谷　胡桃



令和五年度

冬季俳句会作品抄

令和五年十一月二十二日(水)
於・盛岡市勤労福祉会館　参加者十八名
(内一名会員外)

名久井清流　特選

連らなりて牡蠣は青空見ただろか　田代節子

大澤　保子　特選

杏子　道　兜太を探る文化の日　中野楓子

さいとう白沙　特選

連らなりて牡蠣は青空見ただろか　田代節子

互選高点句

寒北斗延長保育室灯る　四戸美佐子

天辺は鳥の領域柿残す　安部克詠

引出しの底の小刀憂国忌　鎌倉道彦

参加者一句抄

稲棒(ぼっち)解くクルスのイエス放つごと　安部克詠

爽やかや俳句の神に見放され　五日市明子

また一人来て白菜の品定め　岩井辛夷

パイプ椅子枯れゆくものの中に在り　大澤保子

式部の実いにしへ人の佇まひ　太田加留子

助手席の鯛焼湿る紙袋　小野寺束子

鬼という字背負いて冬の風に向く　鎌倉道彦

黙念と腕組む漁夫や北颪　さいとう白沙

七五三草履が飛んで晴とでた　澤藤はなの

山眠る細かなことに封をして　四戸美佐子

黄落の上の橋町一番地　髙井武子

紅葉散るマニキュア踊る卓の上　田代節子

杏子　道　兜太を探る文化の日　中野楓子

山眠る深手の傷をそのままに　名久井清流

凍星やみんなが見てるジェノサイド　夏谷胡桃

人ごとのやうに生き来し根深汁　四日市洋子

寄せ返す波ひらひらと小春凪　牧原美喜子

今年の一句＋コメント

（五十音順）

分断の壁にはあらず稲架高し　安部克詠

豊の秋高々と稲架が建つ。それは村の分断ではなく平和の象徴なのだ。世界は今戦に分断、国境に高い壁。そこに思いが辿りつくのだ。

友還らず虹消ゆる迄しやがみこむ　阿部𤇾子

今年の梅の花どきには霜に降られてしまって実もならず、雨不足で野菜もとれず、物価高。猛暑には家にこもる。平和な世を願う。

秋晴や牝鹿のやうな岩手山　五日市明子

その日岩手山は雪も角張りもなく、ただ優しく滑らかだった。色も質感も牝鹿そのもの。誰の理解も求めず１００％自分の為に詠んだ。

ちよつと見て未練の残る揚花火　稲玉宇平

威勢よく上がる音に誘われて一寸のつもりの見物、次々に開く花の競演、いざ帰ろうと思うと次の花火に未練が残るのでした。

T先生に　木啄や天寿とふ賜はりしもの　岩井辛夷

齢九十余りでご自宅で眠るように安らかに逝かれた大先輩。幸せそうな笑顔が目に浮かぶ。今の時代、これは神様からの大きな贈り物。

月の雨に月溶け出しぬ橋の上　及川真梨子

「季節の変わり目ご自愛ください」とよく使いますが、秋から冬が一番堪えます。来年も良い年で、俳句が楽しい年でありますように。

軽やかに村奏でけり落し水　大石文雄

稲に水が不要となる頃、田を固めて刈り取りを容易にする落し水。特に落差のある村の棚田からは心地よい実りの音と感じるのだ。

葉桜となり新たなる影を生む　大澤保子

花は終わり葉桜の刻が来ていた。中央公民館の道路沿いの桜は見事な大木でその影も又。「自分の根源を作品に残す」は鬼房の言葉。

父送り夫も送りて沙羅紅葉　太田加留子

秋彼岸に帰って来た仏様達を送り出し、ほっと一息、清らかな白い花をつけていた庭の沙羅の樹は今は美しい紅葉の季をむかえています。

初音きくために乗り込むオープンカー

小笠原　祐　子

車輪のついた乗り物が好きです。自転車もよいですが、いつかはオープンカーにあこがれます。季節を感じにいくドライブも楽しいです。

稲刈つて一枚の空広げたる

小野寺　束　子

北上川から氾濫する洪水の被害を守るため一四五〇haの一関遊水地業が完成。この広大な遊水地での風景は名画のごと。日本一である。

花のころと聞きし余命やもう逝くか

小　原　き　よ

今年の一句と言えば右記句と思う。もうすぐ一周忌。供華は仏の衣装とか。あの世での倖せを願いながら暮している。

秋の星行き先見えぬこともよし

鎌　倉　道　彦

十一月に入り庭の葉の落ちた枝に新しい葉がでたり、芝桜がぽつぽつ咲きだした。何んだか変である。これからどうなるだろう。

めまとひやわたしは後期高齢者

小　菅　白　藤

小虫どもにまだ若さを感じられるだけでも気分がよい。まだまだという思いで毎日を送っている。俳句の力ありがとう。

送稿のボタンクリック春夕焼

さいとう　白沙

八十代の上り坂にあり、健康第一に過ごしています。足腰が達者なうちに各地を訪ね、詩嚢を肥やしたいと考えています。

去年今年地球の表裏に難民

佐　藤　レ　イ

平和と安全の維持を掲げている国連さえも、歯止めが効かない程、平和からかけ離れていく現実。難民にも幸せな家庭があったはず。

夕焼を使い果して野良着脱ぐ

澤　藤　はなの

農作業は夕暮まで続きます。嫁は夕餉の仕度に、一足早く帰ります。帰る道は、きっとほっとする時間だったことでしょう。

納棺師の深まなざしや春時雨

四　戸　美佐子

春先に義兄が急逝。小柄な細みの女性納棺師の美しい所作が、ずっと心に残っている。人ひとり死ぬことの重さを知らされた。

遠野路や山懐に菊籬

髙　井　武　子

今年は、かつてない異常気象のためか、身ほとりの人々が、この世を旅立っていった。今はただ、祈るばかりの毎日である。

消火栓発火しそうな炎天下　武田稲子

記録的な暑さだった今年の夏。来年も暑くなりそうだとの予想。四季が二季になるかもとの気象予報官。地球がおかしくなっている。

聖五月亡き人にある誕生日　田代節子

五月は亡夫の誕生月。人生の伴侶を失ったり年若い身内に先立たれると、自身が生きている限り故人の年令もひとつづつ重ねられてゆく。

菜種梅雨木椅子ぎちぎち羅須の家　千葉任子

羅須の家、宮沢賢治が創立した羅須地人協会である。今年賢治没後九十年、その家は花巻農業高校敷地内に移築、高校生が清掃している。

炎昼の川銀箔となり流る　照井翠

この春、無事定年退職となった。自由の身となり、今は生活のリズムを模索中だ。毎日カフェに出かけ、本を読み、執筆している。

夏霧や空砲遠く死は近く　中野楓子

早く平穏な日が来て欲しい。一日も早い平和を。与えられた命、どの人もその人らしく生きて欲しいと願う今日この頃です。

春光の矢を射るやうに奥座敷　中村セイ子

明るい陽射が一年中で一番低い所から届いています。矢を射るようにで改まった日という事が解ります。「及川茂登子先生の特選評」

三・一一いつものやうに飯を炊く　名久井清流

人が生きてゆくために飲食は欠かせない。一人者故、飯を炊くのも、食べるのも一人。哀しい時も嬉しいときも、そのくり返し。

スコップや種は光の子どもたち　夏谷胡桃

忙しさを言い訳に、ジャングルのような畑になっていました。それでも種を蒔けば、育ってくれます。冬の小松菜が美味しい。

手に重き叙勲の額や若葉風　新山のぼる

九十才近い。この先どう生きてゆくのか分からない。どんな句が出来るのかも分からない。分からないのが楽しみでもある。

股下は九十センチ子供の日　牧原美喜子

剣道をしている孫。袴を新調する時背比べならぬ股下比べをした。私の父は大谷翔平君の様に大きかった。曾孫は似たのかも知れない。

病衣着て患者となりぬ秋の空

三浦　しおり

一月から足の痛み、五月は鎖骨の骨折、九月は脊柱管の手術と思えば、今年は痛みとの戦いで過ぎた一年でした。

来ぬ人を待つや九月の扇風機

三浦　百合子

広い日本間に、ぽつねんとある扇風機。待つのは暑さか人間か。移りゆく季節へのオマージュが一句になった。

雲低し引鳥の声拾う道

やましためぐみ

朝の散歩中、北へ帰る白鳥の声が聞こえました。見上げた空は雲に覆われ、鳥たちが別れの言葉を落としていったように感じました。

墓洗ふ山に食はるる捨て畑

四日市　洋子

専農の義兄の一周忌、その墓参りの折兄弟達が田の向こうに目をやり、山際の畑は今や山と化し、懐かしく眺めていた。その景の一句。

令和５年11月22日　冬期俳句会の参加者

大会受賞作品抄

◎第三十七回現代俳句東北大会（福島県）募集句

秋田県現代俳句協会長賞

　囀りをたつぷり吸ひし薪を積む　五日市　明子

秀逸賞

　雲の峰真正面から押してくる　小野寺　束子

◎第六十五回啄木祭全国俳句大会

太田　土男選　秀逸

　ふるさとに還り余生の初日受く　大石　文雄

白濱　一羊選　秀逸

　冬うらわれに才ありと思える日　夏谷　胡桃

　薄氷を残さず割って遅刻の子　澤藤　はなの

名久井　清流選　秀逸

　薄氷を残さず割って遅刻の子　澤藤　はなの

二階堂　光江選　秀逸

　啄木忌函館行の雲さがす　岩渕　正力

◎第六十二回平泉芭蕉祭全国俳句大会

岩手日報社賞

　今昔の夢を転がしほととぎす　三浦　寿子

◎第七十六回岩手芸術祭「県民文芸作品集」

名久井　清流賞

　「移りゆく季」（五句）　安部　克詠

◎第七十六回岩手芸術祭文芸祭俳句大会

奨励賞

　新刊の帯を外してより夜長　四戸　美佐子

　澤口　航悠賞

　どこまでが風どこまでが芒原　安部　克詠

◎第十八回奥州市民芸術文化祭・水沢俳句大会

（当日句）

小畑　柚流選　特選・地

　朝市の光あつめて初秋刀魚　小野寺　束子

小畑　柚流選　秀逸

　天高し鋳物の街の昇り旗　三浦　寿子

◎第三十回雑草園祭

（当日句）

北上市教育長賞　岸本尚毅選　特選・天

　花あけび食べてみたきと婆三人　三浦　寿子

◎宮沢賢治没後九十年星めぐり全国俳句大会

（応募句）

白濱　一羊選　特選

　新涼や赤子は手足より目覚め　小野寺　束子

大畑　善昭選　特選

　大門の礎石に梅雨の水たまり　稲玉　宇平

大畑　善昭選　秀逸

　青春の赤き傍線書を曝す　武田　稲子

（当日句）

染谷　秀雄選　秀逸

　森深く遺愛のセロや月祀る　千葉　任子

◎第二十回みちのく「二夜庵」俳句大会

（募集句）

白濱　一羊選　特選・第一席

　消火栓発火しそうな炎天下　武田　稲子

小林　輝子選　特選・第二席
　喜雨を得し五百羅漢の苔衣　　三浦　寿子
小林　輝子選　秀逸
　おつとつとビールあふれて泡の髭　　稲玉　宇平
照井　翠選　秀逸
　石ころが英霊となる敗戦忌　　武田　稲子
小野寺　束子選　特選・第三席
　初蟬や今日からウィッグつけました　　牧原　美喜子
小野寺　束子選　秀逸
　消火栓発火しそうな炎天下　　武田　稲子
（当日句）
大畑　善昭選　特選・第三席／一関文化祭実行委員長賞
小野寺束子選　特選・第二席／一関文化祭実行委員長賞
　脱穀の音に夫婦のこゑ短か　　大石　文雄
大畑　善昭選　秀逸
小野寺束子選　秀逸
　芋煮会知らぬ笑顔がきて隣る　　大石　文雄
白濱　一羊選　特選・第三席／一関文化祭実行委員長賞
照井　翠選　特選・第三席／一関文化祭実行委員長賞
　芋煮会知らぬ笑顔がきて隣る　　大石　文雄

◎第五回盛岡国際俳句大会

（当日句）
名久井　清流選　選者準賞
　勉強がしたかった母冬銀河　　四戸　美佐子
　留守電に残るふたつの咳払ひ　　澤藤　はなの

※紙面の都合により、組作品（五句）は割愛しました。

◇新会員・作品と所感◇

やました　めぐみ

朝散歩

蔕上に浮かせば返る柚子湯かな
麦畑連休明けの鬱隠す
カッコウの声に続いて「バックします」
迎え火を焚く人去りて草の家
頑固者鋼包丁カボチャ切る

この度、新規会員となりました、やましためぐみと申します。この場でご紹介いただけること大変うれしく思います。

私が俳句を始めたのは、七年前、会社の上司に誘われて句会に参加したことでした。目に感じた光景を十七文字にしたり、誰かの句を鑑賞することに面白みを感じ、今日まで続けています。

盛岡市東安庭で生まれた私は、盛岡市内の小中高校を卒業し、大学進学で上京。そのまま東京に住んでいましたが、俳句を始めたわずか一年後に父を亡くし、実家の滝沢市に戻りました。そのため、現在は「実の会」という会にオンラインで参加しています。

この度、みなさんの仲間に入れていただくことで、緊張はありますが、新たな刺激を受けながらより俳句を楽しもうと思う所存でございます。どうぞよろしくお願いします。

追悼

会員の村谷龍四郎さんが令和五年十月に亡くなりました。享年九三歳。ご冥福をお祈りいたします。

萩枯るる句碑に月光触るる音
猫眠る心臓の音冬灯
なぞなぞのなかなか解けぬ冬至風呂
夜を吹雪く底に小さな町工場
スターダスト舞ふ早池峰の神楽殿
初暦みどりの小蜘蛛降りてくる
一本の辛夷が森を明るくす
水切を競ふ父と子風薫る
雪の朝夢のつづきを夢見てる
去年今年何やら肩をたたく者

（胡桃抄）

〈略歴〉昭和五年十一月十五日生まれ。「陸」・「草笛」同人。岩手県現代俳句協会副会長を長く務め、岩手県俳句連盟理事もされていました。句集に『北上川』があります。

〈参考資料〉『環流・草笛五十周年合同句集』『山系・草笛六十周年合同句集』

編集後記

今年度から岩手現代俳句協会の会報担当となった夏谷胡桃です。よろしくお願いいたします。会報の引継ぎが十月中旬も過ぎた頃でした。大きく編集内容を変える時間もないので、従来通りの内容になっています。

「今年の一句」が送られてくるかドキドキしましたが、ご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。

わたしは二〇〇〇年から金子兜太率いる「海程」に所属していました。二〇一八年に金子兜太が亡くなってから、俳句を書く気が無くなっていました。そんなときに、ご縁あって超結社「草笛」に参加することになり、岩手に素敵な俳人衆がいることを知りました。地縁も血縁もない岩手の地でわたしは終わると思います。盛岡と遠野を行き来して暮らしています。目の前に広がる山里の風景を描きたいのですが、なかなかうまくいかない日々です。

新参者なので、顔の知らない会員の方がほとんどです。今年の一句に添えられたコメントには、みなさまの生活がチラッと見えて親しみがもてます。なかなか句会には出られないかもしれませんが、次回も「今年も元気にしている」とお知らせください。

校正は事務局の五日市明子さん、会員の中野楓子さん、澤藤はなのさんに手伝ってもらい、助けられました。ありがとうございます。

みなさま、良いお年を！

（胡桃）